

第三章 進化のなれの果て

ノロにとって地球は住みにくい惑星だった。地球そのものを毛嫌いしているわけでも人間嫌いでもないが原始地球を求めて広大な宇宙に飛び出した。そしてほぼ地球と同じ惑星を見つけ、そこで魚類までの生命体を育て上げた。次は両生類で爬虫類の誕生を目指していた。

そんなノロの惑星にソシアがウクライナーに侵攻して市民を虐殺しているというニュースが入ってきた。時空間次元通信で細々としたニュースは入ってくる。ノロは気にすることはなかったが、今回のニュースについてはイリは危機感を持つ。ウクライナーとイリライナーは仲が良かったからだった。

「地球上からすべての核兵器が消えたのにいつの間製造したのかしら。原子炉もなくなったからプルトニウムは生成できないはずなのに」

イリは首をひねりながらノロの部屋に向かう。そしてノックもせずに入る。ノロがイリに気付くことはない。なぜならマングローブの岸辺でピョンピョン跳ねるハゼという小魚の立体映像を機嫌良く見つめていたからだ。

イリは事細かくニュースを身振り手振りを交えて伝える。しかし、反応はない。

「聞いているの？」

「……」

イリはノロの横に立つと掌をメガフォンにして叫ぶ。

「地球で核戦争が始まりそうなのよ！」

ノロが椅子から転げ落ちる。

「わあ！ イリの原爆が落ちた」

見下ろすイリの剣幕にノロは這って逃げようとする。

「無視するとぶつ殺すわよ」

「ま、待ってくれ。もうすぐ両生類が現れるぞ。これを見てくれ！」

「地球で核兵器を使った戦争が始まるかもしれないのに！ 何が両生類なの！」

「何だって！ まだ喧嘩ばかりしているのか。喧嘩は両生類、じゃなかった両成敗だ」

「ダジャレ言っている場合じゃないわ！」

イリの鉄拳が飛ぶ。

*

「相変わらず人類は進歩していないなあ。ところでウクライナーはイリライナーと仲がいいらしいな」

イリの機嫌を損ねないようににわか勉強で地球の現状を把握したノロが歪んだメガネを修繕しながら尋ねる。

第三章 進化のなれの果て

「地球に行つて戦争を止めなければ」

イリが懇願する。ノロはひげ面のウクライナーの大統領の演説を聞いている。

「なかなかのイケメン。俺ほどではないが」

「この大統領、元々俳優だったのよ。かつこいい！」

「俺もヒゲを生やそうかなあ。顔中ヒゲだらけにしたら圧倒的に俺の勝ち！」

「何を言つてるの。ノロの場合、ヒゲじゃなくて鼻毛でしょ」

「そう言えば最近両生類に夢中になって鼻毛を抜くの、忘れてたなあ」

「抜いてあげようか？」

「自分で抜く」

「どっちでもいいわ。それより地球が大変。何とかしなければ」

ノロは鼻毛を抜きながら、くしゃみをしながら、涙を流しながら応じる。

「ウクライナーを応援しているが、喧嘩の原因は必ず両方にあるものだ」

「いいえ。今回は違うわ。歩いていたら急に殴られたようなもの」

「そうかなあ。ちよつと道を譲れば済む話じゃないのかなあ。あおり運転じゃない、あおり歩行してたんじゃ？」

しかし、イリは引き下がらない。

「あおり戦争よ」

第三章 進化のなれの果て

ノロはいずれ両生類に進化するであろうハゼの立体映像を見つめ続ける。

「ゲンコツはいいけどゲンバクはアカンなあ」

立体映像を消すとイリが見ている浮遊スクリーンに視線を移す。

「詳しく情報を手に入れて分析しなければ。それに欲しいものもあるし」

それまで顔を真つ赤にして怒り狂っていたイリの表情が緩む。

「欲しいものって？」

「カエル」

「カエル？」

「そう。ハゼの先生になってもらうんだ」

「ハゼの先生？」

「飛び跳ねる方法をハゼに教えて貰う」

「バクカ。アホ」

*

「これはひどい！」

ソシアとウクライナーの戦闘を見てノロが顔をしかめる。やっと本気になったとイリが安堵の表情を浮かべる。

「要はプチレンコンを大統領から降ろせば解決だ」

第三章 進化のなれの果て

「そうよ。諸悪の根源だわ」

「そうでもない。彼は進化の最先端にいる、いわば人類の代表者だ」
イリの安堵の表情が複雑にけいれんする。

「代表者?!?!」

「とうより、なれの果てと言うべきかも」

「なれの果て?」

「進化した人類の最終形」

何とかイリの表情が戻る。

「何を言いたいの?」

ノロは口を横に広げてニーツと笑う。

「俺は凶暴な猫の親分が牙をむいてユダヤ人を虐殺した『ヒツ虎』が人類の最終形だと思っ
いたが……」

「ヒットラーでしょ!」

「たとえば話。プチレンコンは動物で言えばライオン? オオカミ?……まあどれでもいいか。
とにかくどうしようもないぐらい人類はいびつな進化をした」

浮遊透過スクリーンにロシア兵が子どもを抱いて逃げまどう母親に銃口を向ける立体映像が
現れる。たまたらず母親は倒れるがそれでも子どもを庇おうと子供を覆う。

第三章 進化のなれの果て

「やめて！」

ソシア兵はかまわず引き金を引く。母親の悲鳴、子どもの泣き声……スクリーンが真っ赤に染まる。ノロは啞然として開いていた口を閉じるとかみしめる。

「進化は、進化は……」

ノロが床に倒れると大の字になる。

「進化すべきではない。進化は悪なのだ。退化させなければ」

残酷なシーンが続く浮遊透過スクリーンから視線をノロに移動させたイリが叫ぶ。

『進化、退化』って何を言いたいの！』

*

「これから両生類、次は爬虫類」

ノロがニーツと笑うと毒々しい赤と白と青の三色模様のヘビが浮遊透過スクリーンに映し出される。ドクロを巻いて舌をシュッシュと出しながら鎌首を上げると今にもイリに飛びかかろうとする。

「キヤア！」

イリがノロの後ろに隠れる。すると青と黄色の縞模様のカエルがヘビの前に立ち塞がる。思わずイリが声援を送る。

「やっちまえ！」

第三章 進化のなれの果て

カエルの口がノロの口のように横に大きく広がるとヘビの頭を飲み込む。

「カエルの勝ち！」

イリが大喜びするがノロはしらけてイリを見つめる。

「何よ！ その軽蔑した視線は？」

ノロは透過キーボードを見つめると視線入力を始める。浮遊透過スクリーンからカエルが消えてソシア軍とウクライナー軍の戦闘画面に戻る。

「ヘビとカエルの戦いと余り変わらないなあ」

イリが首をひねる。

「銃で頭を撃ち抜かれるのと頭から食べられるのとどちらが残酷だと思う？」

「……」

ノロのよく使うトンチにイリはますます言葉を失う。

「もしソシア兵がウクライナー兵を丸食したらどう思う？ バリバリ音を立ててウクライナ

ー兵をおいしそうに食べるんだ」

「やめて！ そんな喩えは」

「やめない。現実を起こっていることだ」

イリが涙ぐむ。

「ソシアがヘビでウクライナーがカエルと思って見ていた。そしてカエルがヘビを飲み込んだ

第三章 進化のなれの果て

とき思わずうれしくなった。でも……」
イリの言葉が途切れる。